

しかし其れを精確に豫想することは、不換紙幣の發行の場合に於けると同様に不可能である。なるほど我々は、若し紙幣を甚だしく濫發すれば、その結果がどうなるかといふことは充分によく知つてゐる、然し我々は、その價值減少の詳細および經過に關しては輕々に豫言することは出来ない。ところが貨幣の數量を適度に調節することの結果については、尙さら輕々しい豫言は出來ぬのである。年々の結果は齊一ではあり得ない、想はざることが起るに違ひなく、忍耐を缺いてはならないのである。人々の無智、短見、短氣をなだめることは、甚だしい濫發といふ比較的單純な事情の場合の其れに劣らず困難であらう。嘗に公衆一般のみならず、譯の分つてゐる筈の人々——實業家階級、有産階級、經濟記者達——も、ぼんやりした考や根深い偏見を有つてゐる。殆ど總ての人々が、物價の騰貴を歓迎し、その下落に反對する。景氣の悪い時には、總ての人々が確かに貨幣の増加を是とするに違ひない。然し其れを減少することには、大抵の人々が反對するに違ひない。政策的には、貨幣を増加することは容易であるが、其れを減少することは困難である。實業家達は、手を擴げる爲めより、多くの貨幣が必要だと切論し、熱狂者や輕信者は通貨の收縮は貨幣詐欺師の狡猾な提案だと痛論するに違ひない。そして此の種の淺薄な議論は絶えず行はれるに違ひない、貨幣制度は、決して、當時の政治家達の勢力範

圍から脱せられないであらう。斯くして此の案は、貨幣制度を安定せしめるどころか、恐らくは其れをば、引續いて不安定なる状態に棄て置くであらう。

### 第三節

#### 弗金貨の價值を安定せしめようこの案、

之にも前者と同じやうな困難がある。

之に類似した提案であつて、卓越せる一經濟學者により巧みに計畫され且つ有力に切論されてゐるものは、弗金貨の價值を安定せしめようとする案 (proposal for a stabilized dollar) である (註一)。之は、他の考案と同じやうに、物價と物價指數とが其の指導的素因である、然しその機構は相違してゐる。之によれば、弗金貨の内容が、物價の變動するに従つて變更される筈である。即ち、指數によつて物價の騰貴しつゝあることが分つたならば、より多量の金が弗金貨に含ませられる筈であり、斯くして、一定量の地金から作られる弗金貨の數が減少するのである。また若し物價が下落したならば、弗金貨の内容が減少し、且つ斯くして、一定量の地金から作られる弗金貨の數が増加するのである。然し乍ら、鑄貨は全然流通させられぬ筈である。金證券の方法が充分に利用される筈である。即ち此の、蓄藏されてゐる公の正金に對する

請求權證書のみが、流通させられる筈である。然し、其れを國庫に提出して得られる弗金貨（或は金地金）は、物價が騰貴し或は下落するに従つて、より重くなり或はより軽くなるに違ひない。諸々の鑛山から採掘された新たな金は、常に新たな金證券を生せしめるわけであるが、しかし此の證券は、之を弗で表せば、物價指數の變動に従つて増加し或は減少するに違ひない。が一般公衆に關する限りでは、其れがどういふ風に變動してゐるかを知つてゐる者は殆ど無いであらう。金證券は常に、『弗金貨』を代表してゐるに違ひない。只だ現實の金を要求する必要がある者のみが、一定の額面價值の金證券を以て、時にはより多量の金が得られ、時にはより少量の金しか得られぬことに、氣が付くであらう。

（註一）アーヴィング・フィッシャー（Irving Fisher）教授は、偉大なる才能を以て此の方法を巧みに考案し、且つ有力に其れを主張してゐる。その要領については、彼の *Stabilizing the Dollar* (1920) 参照。

それが輸出品を影響する特殊の状態は、外國貿易論および外國爲替論を取扱つてからでなくては、理解することが出来ない。加之、本文に述べてゐるやうな現象は、國際貿易の經過に於て現はれる現象の中で最も複雑なものである。余は、第四編第三十二章第六、七節に於て、其れに多少言及してゐる、弗金貨の價值を安定せしめようとする計畫に對する外國爲替問題の特殊關係に關する議論については、*The Quarterly Journal of Economics*, May, 1913 に於ける余の論文参照。

此の提案には、複合標準制の利用を妨げるどころの一大困難、即ち、信用取引を困難ならしめる不確實さが無い。債務の辨濟に際して變動を生じるのは、弗金貨の數ではなくて、外見上に於ては同じものなる弗金貨の内容である。若し斯かる制度が採用されて實施されても、一般公衆は、弗金貨の内容が變動しつゝあることには氣が付かぬであらうし、また氣が付いても兎にかく此の事情によつて攪亂されることはないであらう、このことは丁度、現に彼等が、弗の價值が變動することに氣が付かず、また假に氣が付いても其のために、契約したり賣却したり委託したりすることを躊躇せぬのと同じである。只だ、金を地金として取引する必要がある人々——金を使用する少數の製造業者、及び、外國貿易および外國支拂に携つてゐるところの可なり多數の人々——だけは、弗金貨が可變物だといふ事實に面せねばならぬであらう。大抵の人々は、實業家も他の人々も、現在の蔽はれてはゐるが實は不安定な状態の下に於けると同様に、元氣よく且つ躊躇せずに進むであらう。

然し乍ら、その實際の結果に關しては、前節に於て述べたのと殆ど同じことを此の提案についても謂はねばならない。之も矢張り、想像的に單純化された形態の貨幣數量説に基いてゐるのである。其の作用は、不規則な豫言の出來ぬものであつて、驚くべきことや失望すべきこと

を伴ひ、また殆ど確かに、その出發點に於ては豫想されなかつた偶然の結果を伴ふであらう。其れは、人々の喧々囂々の的となるであらう。然し、若し隱忍持久して遂行すれば、結局は其れによつて、なるほど物價を平坦にすることは出來ないが、しかし(物價の變動に)適應されない正金本位制の下に於けるよりも、遙に長期間に亙る物價の安定を得ることが出來るであらう。包含されてゐる諸々の複雑な問題が不當に且つ無理に單純されてゐることは、弗金貨の量目の増減が流通媒介物を影響し且つ結局物價平準を影響する所の方法を考察すれば、明かになるであらう。名目的弗貨幣に於ける金の分量が減少しても、一般物價に對し或は物價指數に對しては、直接には一寸も影響しないであらう。今假りに、物價指數が増加し、且つ斯くして、金證券を提示すれば、より多量の金を得られるものとしよう。しかし金證券の流通數は必ずしも減少しない。其の數は只だ、其れが實際に提示される場合および其の限りで(そして其の銷却高が、諸鑛山から新たに生産された金に對して發行された新たな發行高を超過する限りで)しか、減少しないであらう。ところが其の提示は、事實上、金が輸出用に必要な場合にしか——工藝用の地金需要が他の方面からは充されない場合は別として——生じないであらう。なるほど、輸出用の要求は恐らく、物價が騰貴しつゝある場合——即ち物價が、弗金貨の價値の安定

せる國に於て他の諸國に於けるよりも迅速に騰貴しつゝある場合——には、現れるであらう。然し輸出用の要求は、一般物價平準によつては定まらないで、外國貿易に登場する諸商品の價格によつて定まるであらう。ところが此等諸品——「内國」商品と區別して「外國」商品とも呼ばれ得るところの——の價格は、直接には、また實に甚だ長い期間に亙つて、國內の諸條件によつてと同じく國外の諸條件によつて定まるのである。なるほど長期間に於ては、國內に於ける物價の一般的高低に關係ある諸勢力が、總ての商品に、即ち、内國商品に同様に外國商品にも——國內のみで賣られる商品に同様に輸出商品にも——及ぶに違ひない。然し可なりの間——數年間——に於ては、輸出商品の價格は他と關係なしに、主としてそれ自身の特殊の原因によつて定まるであらう。そして其れを影響する特殊の諸原因の中には、弗金貨の内容そのものがあるのである。何となれば、外國爲替の經過は此の内容によつて定まるわけであつて、その爲め、輸出品の價格の中に外來の素因が這入るのである。

この制度の下でも、當局の絶えざる干渉を要する凡ゆる制度の下に於けると同様に、常に生じ易いところの、そして就中、價格を誤魔化すといふ疑から生じるところの、人々の誤解、短氣、喧騒、盲目的な狂躁が、迅速に且つ度々起るに違ひない。斯かる組織は、如何に整然と工

夫されても、如何に自動的に實行されるやうに計畫されても、何れとして政治的危険を免れ得るものはない。其れを屈せず撓まず最後まで遂行するためには、常に諸々の困難があるであらう。分つてゐることは只だ之だけである——斯かる制度を實施して居れば、或る勢力が作用し始めて、若し其れを充分に長い間作用せしめて置けば、其の爲めに、通貨制度の基礎に、それから通貨全體に、遂には總購買力に、物價の長く續いた騰貴或は下落を阻止するやうな變動が生じるに違ひない。

#### 第四節 單金本位制は利用し得る最良の貨幣制度を供給する。

世界の現在の貨幣状態は、理想からは遙かに遠いものである。物價平準が定まる方法は、一見した所では渾沌としてゐる、即ち其れは管に、正金の供給および諸商品の分量の變動や、人々の貨幣使用および財の賣買に關する方法および習慣の變化や、種々の國の貨幣法の時々の變更によつてのみならず、無常の法則以外の如何なる法則にも従はぬところの、信用取引高の増減によつても影響されてゐる。殊に、若し正金を基礎としなくなれば、貨幣状態は無茶苦茶

になるのである。世界大戰によつて惹き起されたやうな貨幣状態の下では、交換媒介物は最早、分業と圓滑なる産業經營を促成するための單なる手段たるに止まらない、即ち其れは兵器となり、且つ、一般的混亂および一般的不公平の原因となるのである。が最も甚だしい災害は、廣く認められた形式を採れる——即ち、相當程度の安定を保證するところの正金を基礎とした状態を固守せる——貨幣制度からは生じない。減價紙幣および其の一切の影響（金屬本位そのもの、作用に對する影響をも含む）は、戰爭の齎す不幸の一部分と看做すべきである——即ち、數百萬の人々が互に他人の咽に飛付くところの野蠻状態の結果の一部である。斯かる哀れな状態が續いてゐる限りは、經濟組織の中に安心なものとはない、其の何んな部分でも、平和状態から戰爭の混亂状態に陥入り得るのである。

金本位制を維持するところの廣く認められた貨幣制度に於てさへも、多くの難問題があるものであつて、其れは、既に説明した所によつて充分に明かである。然し適當な救濟方法は分つてゐない。善し惡しに拘らず私有財産制度が維持されて、其の實質上の隨伴現象たる賣買、貸借および放資、好景氣および不景氣、が續く限りは、その限りは貨幣的動搖を避けることは出来ぬやうに思はれる。全貨幣制度の安定を保たしめる爲には、堅實な正金を流通媒介物の基礎と

する方法以上に、利用し得るよい方法はないやうである。此の方法は、利用し得る分量が結局自然の制限によつて定まり、従つてそのために、其れが人間の氣まぐれに依つては左右されなまいといふ、重要な利益を有つてゐる。其れは、開化せるものだと呼ばれてゐると共に又明に未開のものであるところの、全世界の傳統と習慣とに根差してゐる。此の歴史的な且つ心理的な素因は充分に斟酌せねばならない。急に過去のものを破壊し得ない世界に於ては、在來の習慣と全く一致しない方法は實行不可能である。だから、『貨幣』の數量の不規則な動搖を防ぎ、また、信用による貨幣代用物の使用の不規則な動搖を防ぐための最良の方法は、全世界の貨幣制度をして確かに金を基礎とせしむるに在る。そうなつてゐる限りは、二三十年の間に物價が甚だしく變動することもなく、また、如何なる時に於ても如何なる國に於ても、其れが突然に動搖することもないであらう。なるほど其れは完全な制度ではない、然し其れは、利用し得るところの最も有効な制度である。

### 第三篇の參考書類

貨幣に關しては、K. Helfferich, *Das Geld* (2d ed., 1910) は記述的にも分析的にも立派な書物である。貨幣およ

び物價論に關しては I. Fisher, *The Purchasing Power of Money* (2d ed., 1913) が矢張り、保守的なると同時に建設的であつて、立派な書物である。R. G. Hawtrey, *Currency and Credit* (1910) は、力あり見識あり、且つ幾多の點に於て斬新であるが、しかし稍々不手際な書振りにある。B. M. Anderson, Jr., *The Value of Money* (1917) に於ける説は全く見地を異にし、暗示的であり且つ刺戟的であるが、余の考によればその要點に疑問がある。

銀行業に關しては、W. Bagehot, *Lombard Street* (1873) は、タリマンタツて、其の書かれた當時以來甚だしく變動があるにも拘らず、銀行政策に關しては矢張り讀まざる可くない。C. F. Dunbar, *The Theory and History of Banking* (1st ed., 1891; 3d ed., revised by O. M. W. Sprague, 1917) もタリマンタツて、これ亦た充分に參考になる。其れには聯邦準備金制度のことが書かれてあるが、此の問題は E. W. Kemmerer, *The A B C of the Federal Reserve System* (1910) に書かれてある。H. Withers (1910), *The Meaning of Money* は、世界大戦以前の英國に於ける銀行状態を明瞭に且つ面白く説明してゐる。Publications of the National Monetary Commission (1909—11) には、銀行問題および事實に關する莫大な分量の報告がある。

兩金屬主義の基礎原理に關する問題については、L. Darwin, *Bimetallism* (1898) 参照。種々の貨幣本位の使用と起因する國際貿易の混亂に關しては、D. Barbour, *The Standard of Value* (1912) 参照。又 J. M. Keynes, *Indian Currency and Finance* (1913) とを比較されたし——之は有能な書物であり、その表題に引ひき寄せられたるよりも廣く範圍の諸問題に觸れてゐる。J. L. Laughlin, *History of Bimetallism in the United States 1789—1869* 此の問題を論じ盡してゐる。最近の通貨上の變動と邊在地方の金本位制の擴張とは、E. W. Kemmerer, *Modern Currency Reforms* (1916) に述べられてゐる。

物價指數および物價測定方法に關しては、W. S. Jevons, *Investigations in Currency and Finance* (1884) に、

古くは「F. Y. Edgeworth 教授の立派なる量の書」を参照。物價指數の方法および結果に關しては「W. C. Mitchell」の Bulletin No. 173 of the U. S. Bureau of Labor Statistics (1915) に於て最も巧み且つ最も便利に要約してある。

危機に關する長久歴史的の書物は「C. Juglar, Des crises commerciales et de leur retour périodique en France, en Angleterre, et aux États-Unis (2d ed., 1889)」及び「O. M. W. Sprague, A History of Crises under the National Banking System. (1910), published by the National Monetary Commission」である。一八九〇—一九一〇年の現象を充分に且つ綿密に研究してあるのは W. C. Mitchell, Business Cycles (1913) である。此の書の研究方法は、危機の研究に一時代を劃したものである。やはり注目すべき、そしてより大膽に理論的概括を企てたる書物は「A. Afanion, Les crises périodique de surproduction (1913)」である。

大正十二年十二月廿五日印刷  
大正十三年一月一日發行

タウシツグ經濟學原理(3)  
正價金參圓

禁漢譯  
不許  
複製

譯者 長谷部文雄  
發行者兼印刷者 八坂淺次郎  
印刷所 弘文堂印刷部  
京都市丸太町寺町東入  
京都市夷川通川端東入

發行所

京都市丸太町寺町東  
九番  
電話 二〇〇九番

弘文堂書房

譯雄文部谷長 著グッシウタ

# 理原學濟經

第八篇	第七篇	第六篇	第五篇	第四篇	第三篇	第二篇	第一篇
租稅附索引	産業組織	労働問題	富の分配	國際貿易	貨幣の交換機構 <small>正價參四 送料廿七錢</small>	價值と交換 <small>正價貳圓 送料拾八錢</small>	生産組織 <small>正價貳圓 送料拾八錢</small>
同	同	同	續刊	印刷中	同	同	既刊

行發堂文弘 都京

512  
197

終